特集

きもちのいい街。

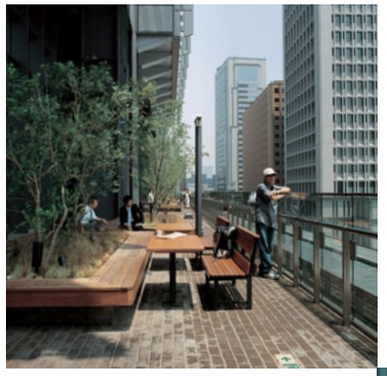
写真／坂本政十賜

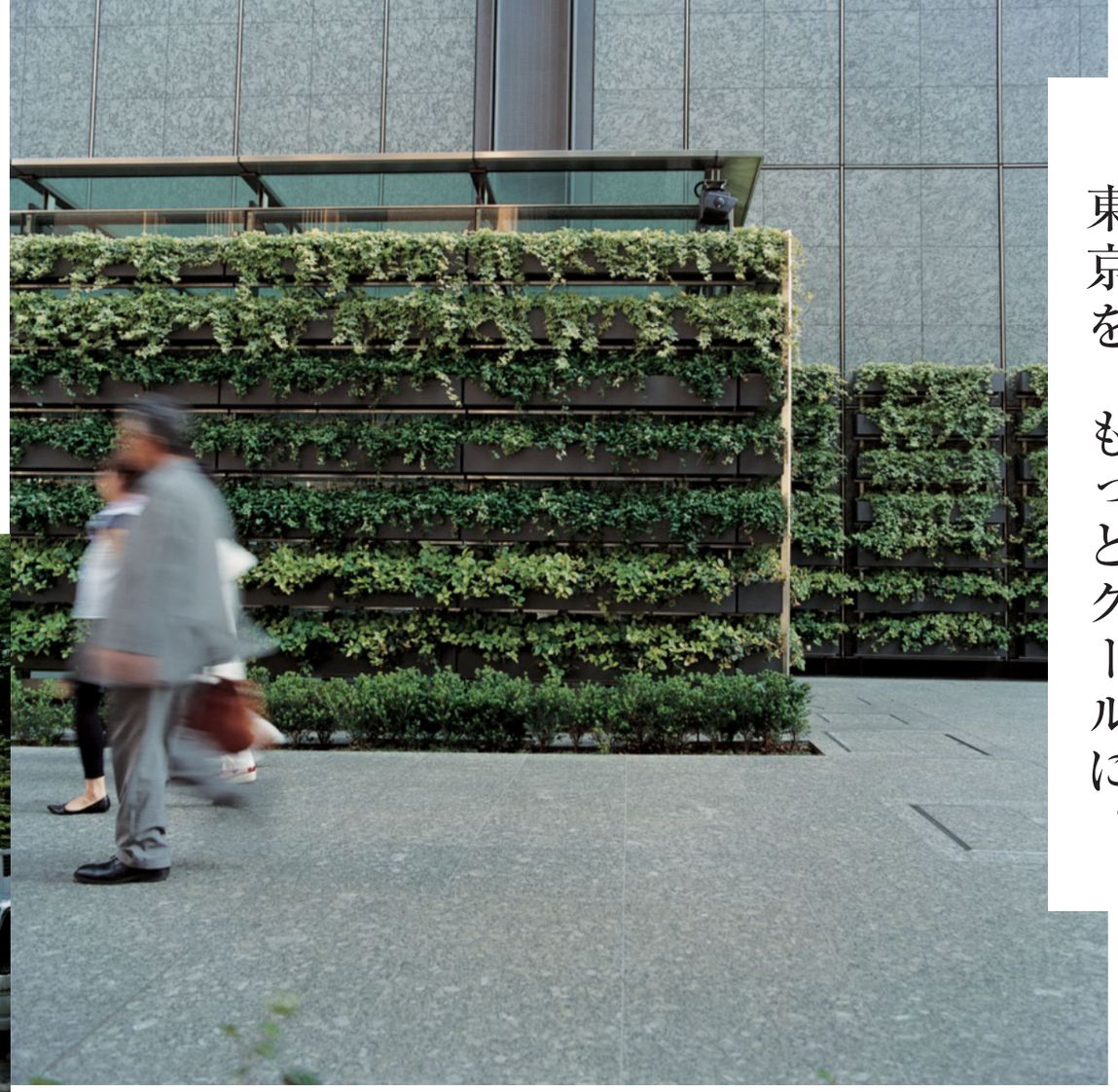
街は、わたしたちの暮らしをささえ、
受け止めてくれる、大切な場所。
ところが最近、心配なことがあります。
都心部の気温が郊外に比べて高くなってしまう、
ヒートアイランド現象。
いまだに交通密集地帯では残っている、大気汚染。
でも、発想をすこし変えれば、街はもっと、
きもちのいい場所になるはず。
街にもっと、水や緑を。
移動は、自動車から自転車や路面電車へ。
いろんなチャレンジが、街を変えていきます。

東京の新丸の内ビルディング前には、ミスト散布装置が設置されており、
人工の霧がヒートアイランド現象をやわらげている。

きもちのいい街。

東京を、もっとクールに。





写真／坂本政十賜

右頁／ビルの壁面もプランターボックスで緑化されている。
右上／ビル10階の環境戦略拠点「エコッツェリア」。丸の内エリアのまちづくりで培われた、さまざまな環境への取り組みを紹介するスペースだ。
右下／丸の内のメインストリート、丸の内仲通り。街路樹の緑が、街ゆく人々に安らぎをあたえている。
左上／地上約31メートルのテラス。7階の飲食ゾーンを取り囲むように植樹がされている。
左下／地上約160メートルの屋上も、もちろん緑化されている。さらには、太陽電池パネルも設置（写真提供／三菱地所）。

加熱する街をクールダウンしよう。
今年4月にオープンした新丸の内ビルディング（新丸ビル）には、
街を気持ちよくするための、エコなアイディアがいっぱいです。

東京の玄関口であり、いま盛んに再開発が行われている大手町・丸の内・有楽町地区――通称、大丸有（だいまるゆう）。この地に、今年4月、新丸ビルが、華々しくオープンした。ファッション・食・雑貨など、さまざまな商業施設もそろった、この話題のスポットにも、実はエコな工夫が、いっぱいある。

たとえば、ビル前では、気温や湿度などが一定の条件に達すると、自動的に人工の霧が放出される、ミスト散布装置が設置されている。水が気化する際に周囲の熱を奪う「蒸散効果」を利用して、ヒートアイランド現象をやわらげる仕組みだ。

1階の駐輪場の壁面、7階の飲食ゾーンを取り囲むテラス、地上約160メートルの屋上は、それぞれ緑化されており、ビル全体をクールダウンしている。グリーンの活用は、先行してお隣の丸ビルでも進んでおり、そこでのノウハウがこの新丸ビルに活かされている。

新丸ビルを開発した三菱地所は、大丸有地区の約3割ものビルを保有しており、街づくりを先導している存在。

「実はビル単体だけでなく、街全体を〝冷やす〟都市デザインを指向しているのです」と、同社の都市計画事業室の井上成副室長は話す。

「大丸有地区は、皇居や日比谷公園といった大規模な緑地に隣接しています。そこで地区内に水と緑のネットワークを構築して、この〝クールスポット〟がうみだす冷気をうまく街の中へ導くことができないか検討しています」

日本橋川、行幸通り、馬場先通り、日比谷通りなどを通じて、風が街に導かれる。さらには、丸の内仲通りの街路樹を風が伝い、横方向にも冷気は広がっていく……。今後、皇居と東京駅を結ぶ行幸通りの街路樹を増やし、路面に中水（雨水や排水を再生処理したもの）を散水するなど、地面をクールダウンする試みが、官民協力して行われる。そこに、建物の配置の工夫や、水と緑のネットワークによって風が流れ込み、涼やかな通りが実現する訳だ。

いくつもの「風の道」が通るようになれば、東京はきっと、もっと気持ちいい。

右頁／自転車通勤を始めてから、タクシーを利用することもなくなったという北爪さん。
休日には、都内のさまざまな場所に足を伸ばして行動範囲をどんどん広げている。
左頁／白の車体を彩るアクセントカラーは紫、青、緑など全部で7色。「赤に乗ると願い事が叶う」なんて、女子高生の間ではウワサになっているのだそう。
※EST(Environmentally Sustainable Transport)…OECD(経済協力開発機構)が提案する新しい政策ビジョン。長期的視野で交通・環境政策を策定・実施する取り組み。

きもちのいい街。

きもちのいい乗り物

いつもの交通手段を、環境にやさしい乗り物にかえてみる。
これだけで、CO_2の排出量を数分の１に減らすことができます。
エコな乗り物で、快適な街の暮らしを楽しみませんか。

路面電車に乗ろう

写真／坂本政十賜

路面電車イコール、昔ながらのアナログな乗り物。そんなイメージを持っている人も多いはず。ところが最近、〝環境的に持続可能な交通（※EST）〟として、改めて注目を集めている。ＪＲの在来線からリニューアルを果たし、昨年4月に開業した富山市の「富山ライトレール富山港線」（通称ポートラム）もそのひとつ。

そもそもＥＳＴが目指すのは、マイカー依存を減らし、できるだけ環境に配慮した移動手段を、一人ひとりが選択するようになる社会。「車移動を止めてポートラムに乗ると、CO_2は一人につき約9分の1に削減できるんですよ」と、富山市都市整備部の高森長仁さん。とはいえ、ポートラムを利用してもらうには、車以上の利便性がなくてはダメ。そこで富山市では、在来線時代より電車の本数を増やすなど、サービスの向上にも力を入れた。結果、開業以来、約1割の人が車移動から転換したという。利用者の中にはお年寄りも多い。今まで気軽に外出できなかった人たちの身近な足としても、定着し始めている。路面電車は少子高齢化時代を見据えた、未来型の移動手段といえるかもしれない。

自転車通勤のすすめ

写真／かくたみほ

私たちの暮らしは、今や自動車などの交通手段を抜きには語れない。ところが２００５年現在、人の移動に伴うCO_2の排出量は、１９９０年比で約40％も増加。特に自動車はその約9割を占めている。そんな中、エコな交通手段として、改めて自転車が注目されている。国土交通省によれば、距離が5㎞程なら、他の交通機関より自転車の方が、所要時間や環境の点でも優れているのだという。

セレクトショップ「Ｃｈｅｒ」のプレスを務める北爪奈津子さんは、自転車通勤を始めて約3年。下北沢から中目黒まで、約4㎞の道を毎日通っている。

「電車通勤していた頃は1時間かかっていたのが、今では15分。季節ごとの自然を楽しみながらのんびり自転車に乗るのが気持ちいいですね」という北爪さん。「大雨や雪が降らないかぎり、自転車で通っています。体力もついて風邪も引かなくなり、いいことづくめですね。友人や同僚にも、仲間が増えてきました」。

環境にも、健康にもいい自転車通勤。交通ルールを守り、ベストなルートを見つけたら、あなたも明日から自転車ツーキニストの仲間入りだ。

きもちのいい街。

街を変える、水と風のチカラ

街の暮らしを快適にする、さまざまな工夫。
なかでも、水や風など、自然のチカラを利用した取り組みをご紹介します。

老若男女、皆が気軽に参加して涼を楽しめる環境活動が「打ち水大作戦」だ。
打ち水大作戦本部　URL：http://www.uchimizu.jp/

打ち水大作戦

写真/君塚和子

「東京都内で散水可能とみなされるエリアに、1㎡につき1リットルずつの水をまくと、気温は2℃下がる」。土木研究所によるこの試算に基づいて、2003年夏、深刻化するヒートアイランド現象などに対する社会実験として、「打ち水大作戦」は始まった。

江戸時代からの知恵である打ち水を現代に呼び戻したこの試みには、約34万人が参加し、各会場で平均約1℃の気温低下が実証された。2006年には、全国で約770万人もの人が打ち水に参加。この「大作戦」は、夏の風物詩になりつつある。

打ち水の唯一のルールは、水道水を使わないこと。風呂の残り湯や雨水などをペットボトルやバケツに溜めておき、暑い日の朝・昼・夕に水を路面にまく。これだけで、真夏の気温を下げることができるのだ。「5年目の今年は、全国の参加者同士のネットワーク作りに力を入れていきたいと考えています」と打ち水大作戦本部のハッタケンタロー氏は語る。「打ち水大作戦2007」の期間は、7月23日からの1カ月間。これからの夏本番、打ち水に参加して涼しい風を感じてみては？

交差点の環境改善のために、平成17年3月に完成した「YUMEパーク・大和町」。

風の通り道

写真／坂本政十賜

板橋区の大和町交差点は、これまでNO_2（二酸化窒素）の濃度が4年連続で全国ワースト1になったこともある交差点だ。中山道、環状7号線、そして首都高速5号線が立体交差した3層構造で、1日の交通量は約24万台にも及ぶ。さらに交差点の周囲にビルが建ち並んでいるため、汚染された空気が澱みやすくなっていた。

そこで考えられた〝ガス抜き〟策が、実にユニークだった。交差点の一角に空気の通り道をつくり、澱んだ空気を拡散しようというのだ。店舗統合により生じた銀行の跡地を、国土交通省と東京都、首都高速道路公団（当時）が、板橋区と協力して公園にすることで排ガスが抜ける空間を生み出した。完成した公園は25メートル四方の小さなスペースだが、これだけでもかなりの改善効果が上がっているという。

特に冬季におけるNO_x（窒素酸化物）の濃度が大幅に改善されたそうだ。これはこの公園が交差点の北西角地にあって、冬に多い北西風の入り口に位置するからだ。公園の後背地にも高いビルがなく、文字通り風の通り道ができたため、大気汚染の改善に威力を発揮したようだ。

特集総論

都市は自然を求めてる

ヒートアイランド現象は、
都市環境に深刻な影響を及ぼすだけでなく、
地球の温暖化をも加速させています。
都市の過熱化を止めるため、
今、何が必要なのでしょうか？
都市環境に詳しい
早稲田大学の尾島俊雄さんに聞いてみました。

尾島俊雄（おじまとしお）
早稲田大学理工学部教授。専門は、建築・都市環境工学。NPOアジア都市環境学会会長。都市環境について、文明論的な視点に立った様々な提言を行っている。

Qヒートアイランド現象とは？

尾島　都心部の気温が周辺部よりも高温になる現象です。その気温分布を等温線で描くと、等高線と同じように盛り上がり、「熱の島」のようになることから名付けられました。最近では、熱の島が周辺部にまで広がり、ヒートコンチネンタルとも言うべき状態になっています。大都市で30℃を超えた延べ時間は、この20年間で2倍になっています。

Qなぜ、そんなに熱くなっているのですか？

尾島　水分蒸発による冷却効果をもつ地表部が、アスファルトやコンクリートで覆い尽くされてしまったからです。オフィスビルやマンションが増えて、都市自体、熱が逃げにくい構造になっている上、OA機器やエアコンからの排熱が増え、この傾向に拍車をかけています。

Qその対策として、どのようなことが考えられるのでしょうか？

尾島　緑地、水辺など冷却効果をもつクールスポットを都市構造の中に組み込むことです。都市内にいくつかの大型緑地を確保し、水路でつないで「風の道」をつくるなど、それぞれのクールスポットを有機的に結びつけることで、都市をクールダウンさせる。それを地表面だけではなく、空中や地下も視野に入れて考える。池と池を地下水系で結んだり、屋上緑化や壁面緑化で緑地面積を増やしていくなど、立体的に自然環境と共生した都市づくりを目指すべきです。

Qそうしたことを行うためには、発想の転換が必要ですね？

尾島　これまで都市というのは、クルマ中心の発想で設計されてきましたからね。20世紀は自動車の世紀でもあったわけですが、都市においては、その中心的な役割を終えつつあります。地下鉄もありますし、新交通システムもあります。自転車で移動してもいい。都市の地表面をクルマから明け渡してもらい、その分を緑地に置き換えていくぐらいの発想が必要です。

Q私たちにできるヒートアイランド対策って何かありますか？

尾島　冷房温度を高めに設定するためのクールビズなど、ライフスタイルの変革はとても効果があると思います。そうした意味では、避暑というのもかなり効果的でしょうね。例えば、夏の間、東京の人口が半分になれば、かなり涼しくなるはずです。季節を考えたライフスタイルは、渡り鳥や回遊魚の智恵です。環境と共生した都市を目指すためにも、今後こうした自然の智恵を大いに見ならうべきです。自然のポテンシャルを都市問題の解決にいかに活かしていくのか。それが私たちに問われています。

写真／坂本政十賜